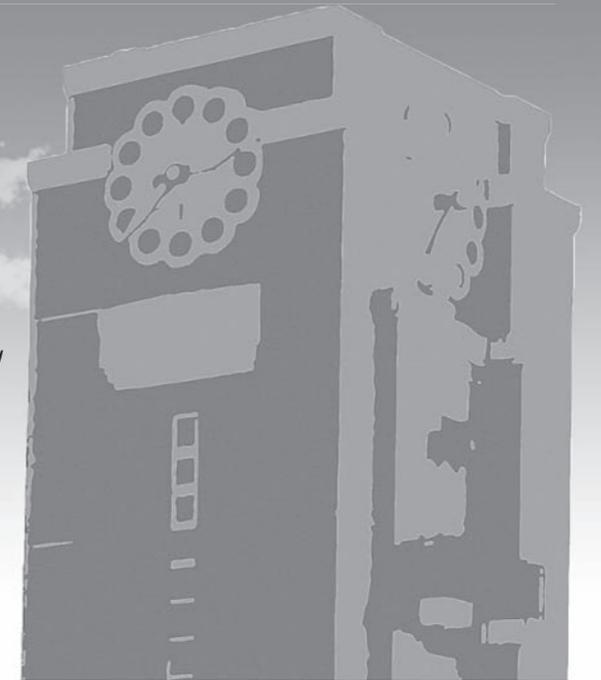


京大出身 森見

「読者の期待に

小説家 登美彦さん

応えない」



小説家の原点

—なぜ小説家を目指したのですか

小学校2～3年生のころに友達とやった紙芝居がとても楽しかったことがきっかけで、母親に原稿用紙を買ってもらって小説を書き始めました。それが始まりです。高校のときは何の根拠もなく小説家になるだろうと思っていました。

—大学時代はどのような執筆活動をしていましたか

休学していた4回生の後半から5回生前半の間に、大学院の試験を受けて、また大学に戻ったんですけど、研究室に入る前に何か締めくくり的なことをしようと思いました。そこで後に『太陽の塔』となる作品を書いたんです。それまでは今の自分の作風とは異なる、青春の汚点みたいな小説を書いていたんですけど、開き直って、友達と膨らませていた妄想などを文章にしました。研究室に入るころに日本ファンタジーノベル大賞の締め切りがあったので、そのころには家に帰るたびに応募するための最後の仕上げをしていました。

創作活動について

—なぜ森見さんの作品には京都・京大を舞台にした作品が多いのですか

デビュー作の『太陽の塔』を書いていたときは、京都とか京大とかがどうこうではなく、自分がよく知っているからという理由だけで舞台にしていました。でもだんだん、現実の街を下地にしても、京都だったら他の街ではあり得ない描写も許されることに気づいたんです。たとえば『有頂天家族』のように天狗や狸が出てくる話で現実の街を舞台にする場合、京都以外の街では違和感があり、書きにくいと思います。そんなことに書いていく中で気づいて、京都を舞台にして自分の妄想で好きなことを書いていこうと思うようになりました。だから、京都が舞台の小説が多いんです。

—「妄想で書く」とのことですが、作品はどのような過程を経てできるのですか

書き始めるときはこんなものを書こうと決めているんですが、書いているうちに別のことを思いついて、小説の形が変わっていくことも多々あります。何度も

書き直しをしながら、だんだん育っていく感じですかね。基本は自分が日ごろ経験したことや、読んだ本や見た映画、そういう断片をつなげて書いています。昔は勢いで書いていた部分もあったのですが、やっぱりそうそう思いつくものではないです(笑)。

こんな話だったら面白そうっていうのはありますが、その保証はないので、書き始めた当初は不安なんです。仕上げになってくるにつれて、確信が持てるようになります。言ってみれば、井戸を掘り当てるようなものです。

—森見さんの作品が小説から形を変えて舞台化・アニメ化されていることについてどう思われますか

僕も人間なので、原作者として自分の名前がアニメの最後に出てくることにうれしさはあります。ただ、自分に責任があるのは自分が作った小説だけですから、それ以外の形態になるとそんなにあれこれ言えるものではないです。小説が子供だとしたら、アニメとかは孫みたいなものなので。誰に作品のアニメ化や舞台化

(医・院 沢)
(寝ぶつちには気をつけてくださいね；編)

を託すかは自分で慎重に決めています。一旦託すことを決めてしまえば、その先は外野で応援し、いいものを作ってくださいとお祈りしているだけです。

—今後、どのような作品を書いていきたいですか

前々から書くものを決めていたのではなく、そのとき一番書きたいものを書きたいと思っています。そのため、今まで読者が僕の作品だと思っている型に自分の書きたい作品を当てはめてしまうのは避けようと思っているんです。でも僕は根はまじめだから、たとえば大学生ではなく小学生を主人公にした『ペンギンハイウェイ』のときも、大学生が主人公の作品を待っていていたであろう読者に申し訳ないと思ったくらいです(笑)。確かに最終的には読者に楽しんで読んでもらえる形にしなければならいけれど、最初から相手の好反応を狙うのはムリなんです。僕の好きな言葉は「読者の期待に応えない」です。読者の好みについてい合わせそうになる自分に言い聞かせている感じですね。



PROFILE

1979年奈良県生まれ。京都大学農学部生物機能科学科応用生命科学コースを卒業、同大学院農学研究科修士課程修了。

2003年、『太陽の塔』で第15回日本ファンタジーノベル大賞を受賞。『有頂天家族』や『四畳半神話大系』はアニメ化、『新釈走れメロス』は舞台化されている。

はみだし
すてーじ

あつくてとけそうです
⇒期末試験は大丈夫そうですね

はみだし
すてーじ

4回生になって初めて読者カード書いてみた
⇒初めての読者カードではみだせましたよ。

(工・4 アスタナ)
(これから末永くお願いします；編)

大学生時代

——学生時代、何か部活やサークルに入っていましたか

ライフル射撃部に入っていました。体育会系の部活の一般的な先輩後輩といった上下関係に慣れていたんですが、活動はそこまできつくないところに入りたかったのが入ったきっかけです。

競技自体みんな大学から始めるので、もしかしたら入った瞬間に才能が開花ということもあるかなと期待しましたが、そんなことはなかったです（笑）。1・2回生でやる気をなくしてしまって、競技自体はあんまり熱心にやっていなかったですね。

でも仲の良い友人ができ、学部より部活の人のほうが親しかったくらいです。大学生時代に執筆した、『太陽の塔』に出てくる主人公の友達もライフル射撃部の友達がモチーフなんです。1年に2回ほど、東京にいるその友達が京都に帰って

くるので今でも集まって飲みます。

あと競技とは関係ないですが、部室に置いてあるノートに小説って形でもないので、ふざけた内容の文章を書いたりしていました。そういうので文章を書く腕が磨かれたのかもしれないね。試合のときのパンフレットも書いていたんですけど、それはいつも好評でした。部活を引退するときにはノートに書き留めたものをまとめて、冊子にしてみんなに配りました。

——部活以外の私生活はどのような感じでしたか

下宿場所は『太陽の塔』の主人公が下宿していた所と全く同じ場所でした。広さは四畳半でしたよ。下宿先は入学したときに父親と一緒に見て回って、言われるがままに決めたんです。ここに絶対下宿したいとかいうのは特になかったんで

すけど、物件を2件見て、1件目が座敷牢みたいなどこは嫌だなあと。2件目は明るいところだったので、そこに決めました。6年間住んだ後、『太陽の塔』の賞金で引っ越して、その下宿先を出ました。次の下宿先は河原町今出川であって、六畳ぐらいでした。

下宿中、自炊は全然しなかったです。どうせ自分で作ったっておいしくないと思いましたが、作ろうとも思わなかったですね（笑）。だから、ご飯は大学の食堂や大学周辺のお店で食べていました。ちなみに今でもベーコンエッグくらいしか作りません。

あと、通学に自転車を使っていたのですが、そのかごにたばこの吸い殻をいっぱい入れておいて、他の人に持っていられないようにしていました。でもそれが原因でお巡りさんに声を掛けられたことがあります（笑）。

自転車といえば『太陽の塔』で主人公

が自転車を「まなみ号」と呼んでかわいがっていますけど、僕が「まなみ号」と呼んでいたわけではないですよ（笑）。

——では、学生時代の夏休みはどのように過ごしていましたか

長期休暇なので、旅行に行きましたね。例えば1回生のときは青春18きっぷで友達と北海道、2回生のときは一人で恐山や太宰治の史跡を見に出掛けましたよ。

5回生のときは友達とママチャリで琵琶湖一周したりとかもしましたし。これは人生でしんどい旅行ベスト3に入るほどでした。2泊3日だったんですけど、昼間は暑すぎて走れなかったです。琵琶湖を一周回ってへとへとで浜大津のベンチで休んだことを覚えています。とても仲の良い友人と行ったので、その旅行に行くまでは会話が途切れたこともないくらいでしたが、そのときばかりは疲れ果

ててしまっていたようで、二人ともとても静かでした（笑）。そこから逢坂の関を越えるときの記憶はないです。そのころ、僕たち関々としてエネルギーを持って余っていて、「琵琶湖でも走ってないと言われてられない！」みたいな感じだったんです。そういえば、この話も小説の中で書きたかったんですけどどうも書けなかったんですね。

旅行とかに行かないときは、扇風機しかない下宿先の四畳半で過ごすのは暑すぎたので、実家に帰ってごろごろしていました。下宿先に残っているときには、下宿先からも近い岡崎の京都市勧業館みやこめッセや琵琶湖疎水記念館の中に入って涼んでいました。

あと、夏休みに限ったことではないのですが、古本屋さんを自転車に乗って飛び回って、好きな本を買っていました。朝からずっとそれだけして終わった日もあったくらいです。

——大学生活において読んだ本は現在、森見さんの作品にどのような影響を与えているのでしょうか

僕は学生時代、特に近代文学を読んでいた。そういう昔の本の方が新しい本よりも自分に合っているような気がしていたんです。なぜなら、現代の小説なんて読んでいる場合ではない、現代に追いつく前に土台になる昔の本を読まなければと考えていたからです。おそらくその知識が基礎にあるから、僕の作品には近代の小説によく見られるような表現が多いのだと思います。

太宰治の作品を下地にした『新釈走れメロス』をはじめとして、近代小説に関連した小説も書いているので、とても近代の日本文学に詳しく思えるってよく言われるんです。でも近代文学を読んではいましたが、さほど読書家というわけではないですよ、念のため。

作品紹介



▲アニメ化された『有頂天家族』
下鴨社に住まう狸一家を主人公に、天狗や神など、人ならざるものたちの交流を描く



▲アニメ化された『四畳半神話大系』
サークル選びを間違えたと言断する京大生がもし別のサークルに入っていたら、という「もし」の世界を描く



▲舞台化された『新釈走れメロス』
太宰治の同名の作品を下地に、京大生がNF中の京大や京都を、追っ手を振り切り縦横無尽に駆け巡る



はみだし
すてーじ

本当の夏休みはこれからだ……!!
⇒京大生らしい過ごし方をしたいですね。

(文・院 うむ)
(ぜひぜひ森見さんのを参考に!!;編)

京大生に一言

——最後に、京大生にメッセージをお願いします

何を皆さんに言っているかわかんないです（笑）。大学生の面白い日常を描いた作品が僕の作品の中には多いので、よっぽど大学時代は楽しかったんでしょうねって言われます。けれど、実はそうでもなくて、そんなに充実していたって感じでもないんです。

学生ときは、ずっとやる気が出ないとかこのままでもいいのかなとか、もやもやしていてどうも楽しめなかったんです。だからあんまり偉そうなことは言えないですね。自分が大学生のときに大学を卒業した先人からの話を聞いても、素直に聞くとはずまず思えないです。

たとえば、デビュー作の『太陽の塔』を書くまでは全く違う作風でしたし、『太陽の塔』みたいな文章ってもともとそんなに書きたかったわけではないんですよ。狙って作ったわけではなく、全然自分が

意識していない、ライフル射撃部のノートとかで修行していて、勝手にそっちで芽が出たという感じなんです。だから何から芽が出るかわからないから、いろんなことをやっておけばいいんじゃないでしょうかね。でも他人から「今のうちこうしておいた方がいいよ」とか言われても、自分に関わってくることや日常に関わってくることじゃないと結局やらないんですよ。言ったところでみんな同じ間違いをしていくと思います。

だから、「僕はこんな失敗をしたからみんなは気をつけてね」とか、いろいろ言うことがないわけではないですけど、それを言うことに意味があるのかということに対しては疑問を感じます。つまり、メッセージがないっていうのがメッセージですかね（笑）。

——ありがとうございました (P.N.玉露)



▲森見さんが数々の作品の中でも特に思い入れが深いとおっしゃる、デビュー作、『太陽の塔』とともに

はみだし
すてーじ

7回生以上に実際に会ったことがない。
⇒会うのは簡単です

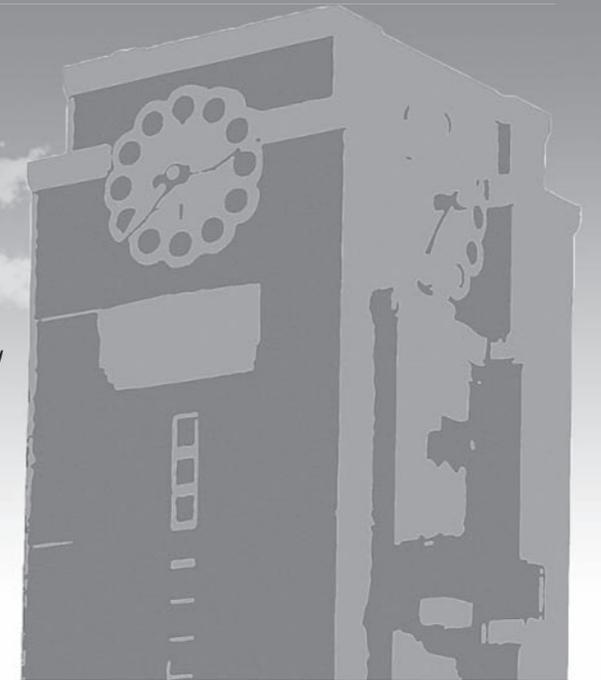
(法・5 みつらん)
(それじゃあ、あなたが…… (以下略);編)

京大出身 森見

「読者の期待に

小説家 登美彦さん

応えない」



小説家の原点

—なぜ小説家を目指したのですか

小学校2～3年生のころに友達とやった紙芝居がとても楽しかったことがきっかけで、母親に原稿用紙を買ってもらって小説を書き始めました。それが始まりです。高校のときは何の根拠もなく小説家になるだろうと思っていました。

—大学時代はどのような執筆活動をしていましたか

休学していた4回生の後半から5回生前半の間に、大学院の試験を受けて、また大学に戻ったんですけど、研究室に入る前に何か締めくくり的なことをしようと思いました。そこで後に『太陽の塔』となる作品を書いたんです。それまでは今の自分の作風とは異なる、青春の汚点みたいな小説を書いていたんですけど、開き直って、友達と膨らませていた妄想などを文章にしました。研究室に入るころに日本ファンタジーノベル大賞の締め切りがあったので、そのころには家に帰るたびに応募するための最後の仕上げをしていました。

創作活動について

—なぜ森見さんの作品には京都・京大を舞台にした作品が多いのですか

デビュー作の『太陽の塔』を書いていたときは、京都とか京大とかがどうこうではなく、自分がよく知っているからという理由だけで舞台にしていました。でもだんだん、現実の街を下地にしても、京都だったら他の街ではあり得ない描写も許されることに気づいたんです。たとえば『有頂天家族』のように天狗や狸が出てくる話で現実の街を舞台にする場合、京都以外の街では違和感があり、書きにくいと思います。そんなことに書いていく中で気づいて、京都を舞台にして自分の妄想で好きなことを書いていこうと思うようになりました。だから、京都が舞台の小説が多いんです。

—「妄想で書く」とのことですが、作品はどのような過程を経てできるのですか

書き始めるときはこんなものを書こうと決めているんですが、書いているうちに別のことを思いついて、小説の形が変わっていくことも多々あります。何度も

書き直しをしながら、だんだん育っていく感じですかね。基本は自分が日ごろ経験したことや、読んだ本や見た映画、そういう断片をつなげて書いています。昔は勢いで書いていた部分もあったのですが、やっぱりそうそう思いつくものではないです(笑)。

こんな話だったら面白そうっていうのはありますが、その保証はないので、書き始めた当初は不安なんです。仕上げになってくるにつれて、確信が持てるようになります。言ってみれば、井戸を掘り当てるようなものです。

—森見さんの作品が小説から形を変えて舞台化・アニメ化されていることについてどう思われますか

僕も人間なので、原作者として自分の名前がアニメの最後に出てくることにうれしさはあります。ただ、自分に責任があるのは自分が作った小説だけですから、それ以外の形態になるとそんなにあれこれ言えるものではないです。小説が子供だとしたら、アニメとかは孫みたいなものなので。誰に作品のアニメ化や舞台化

(医・院 沢)
(寝ぶつちには気をつけてくださいね；編)

を託すかは自分で慎重に決めています。一旦託すことを決めてしまえば、その先は外野で応援し、いいものを作ってくださいとお祈りしているだけです。

—今後、どのような作品を書いていきたいですか

前々から書くものを決めていたのではなく、そのとき一番書きたいものを書きたいと思っています。そのため、今まで読者が僕の作品だと思っている型に自分の書きたい作品を当てはめてしまうのは避けようと思っているんです。でも僕は根はまじめだから、たとえば大学生ではなく小学生を主人公にした『ペンギンハイウェイ』のときも、大学生が主人公の作品を待っていていたであろう読者に申し訳ないと思ったくらいです(笑)。確かに最終的には読者に楽しんで読んでもらえる形にしなければならいけれど、最初から相手の好反応を狙うのはムリなんです。僕の好きな言葉は「読者の期待に応えない」です。読者の好みについてい合わせそうになる自分に言い聞かせている感じですね。



PROFILE

1979年奈良県生まれ。京都大学農学部生物機能科学科応用生命科学コースを卒業、同大学院農学研究科修士課程修了。

2003年、『太陽の塔』で第15回日本ファンタジーノベル大賞を受賞。『有頂天家族』や『四畳半神話大系』はアニメ化、『新釈走れメロス』は舞台化されている。

はみだし
すてーじ

あつくてけそうです
⇒期末試験は大丈夫そうですね

はみだし
すてーじ

4回生になって初めて読者カード書いてみた
⇒初めての読者カードではみだせましたよ。

(工・4 アスタナ)
(これから末永くお願いします；編)

大学生時代

——学生時代、何か部活やサークルに入っていましたか

ライフル射撃部に入っていました。体育会系の部活の一般的な先輩後輩といった上下関係に慣れていたんですが、活動はそこまできつくないところに入りたかったのが入ったきっかけです。

競技自体みんな大学から始めるので、もしかしたら入った瞬間に才能が開花ということもあるかなと期待しましたが、そんなことはなかったです（笑）。1・2回生でやる気をなくしてしまって、競技自体はあんまり熱心にやっていなかったですね。

でも仲の良い友人ができ、学部より部活の人のほうが親しかったくらいです。大学生時代に執筆した、『太陽の塔』に出てくる主人公の友達もライフル射撃部の友達がモチーフなんです。1年に2回ほど、東京にいるその友達が京都に帰って

くるので今でも集まって飲みます。

あと競技とは関係ないですが、部室に置いてあるノートに小説って形でもないので、ふざけた内容の文章を書いたりしていました。そういうので文章を書く腕が磨かれたのかもしれないね。試合のときのパンフレットも書いていたんですけど、それはいつも好評でした。部活を引退するときにはノートに書き留めたものをまとめて、冊子にしてみんなに配りました。

——部活以外の私生活はどのような感じでしたか

下宿場所は『太陽の塔』の主人公が下宿していた所と全く同じ場所でした。広さは四畳半でしたよ。下宿先は入学したときに父親と一緒に見て回って、言われるがままに決めたんです。ここに絶対下宿したいとかいうのは特になかったんで

すけど、物件を2件見て、1件目が座敷牢みたいなどこは嫌だなあと。2件目は明るいところだったので、そこに決めました。6年間住んだ後、『太陽の塔』の賞金で引っ越して、その下宿先を出ました。次の下宿先は河原町今出川であって、六畳ぐらいでした。

下宿中、自炊は全然しなかったです。どうせ自分で作ったっておいしくないと思いましたが、作ろうとも思わなかったですね（笑）。だから、ご飯は大学の食堂や大学周辺のお店で食べていました。ちなみに今でもベーコンエッグくらいしか作りません。

あと、通学に自転車を使っていたのですが、そのかごにたばこの吸い殻をいっぱい入れておいて、他の人に持っていられないようにしていました。でもそれが原因でお巡りさんに声を掛けられたことがあります（笑）。

自転車といえば『太陽の塔』で主人公

が自転車を「まなみ号」と呼んでかわいがっていますけど、僕が「まなみ号」と呼んでいたわけではないですよ（笑）。

——では、学生時代の夏休みはどのように過ごしていましたか

長期休暇なので、旅行に行きましたね。例えば1回生のときは青春18きっぷで友達と北海道、2回生のときは一人で恐山や太宰治の史跡を見に出掛けましたよ。

5回生のときは友達とママチャリで琵琶湖一周したりとかもしましたし。これは人生でしんどい旅行ベスト3に入るほどでした。2泊3日だったんですけど、昼間は暑すぎて走れなかったです。琵琶湖を一周回ってへとへとで浜天津のベンチで休んだことを覚えています。とても仲の良い友人と行ったので、その旅行に行くまでは会話が途切れたこともないくらいでしたが、そのときばかりは疲れ果

ててしまっていたようで、二人ともとても静かでした（笑）。そこから逢坂の関を越えるときの記憶はないです。そのころ、僕たち関々としてエネルギーを持って余っていて、「琵琶湖でも走ってないと言われてられない！」みたいな感じだったんです。そういえば、この話も小説の中で書きたかったんですけどどうも書けなかったんですね。

旅行とかに行かないときは、扇風機しかない下宿先の四畳半で過ごすのは暑すぎたので、実家に帰ってごろごろしていました。下宿先に残っているときには、下宿先からも近い岡崎の京都市勧業館みやこめっせや琵琶湖疎水記念館の中に入って涼んでいました。

あと、夏休みに限ったことではないのですが、古本屋さんを自転車に乗って飛び回って、好きな本を買っていました。朝からずっとそれだけして終わった日もあったくらいです。

——大学生活において読んだ本は現在、森見さんの作品にどのような影響を与えているのでしょうか

僕は学生時代、特に近代文学を読んでいた。そういう昔の本の方が新しい本よりも自分に合っているような気がしていたんです。なぜなら、現代の小説なんて読んでいない場合ではない、現代に追い付く前に土台になる昔の本を読まなければと考えていたからです。おそらくその知識が基礎にあるから、僕の作品には近代の小説によく見られるような表現が多いのだと思います。

太宰治の作品を下地にした『新釈走れメロス』をはじめとして、近代小説に関連した小説も書いているので、とても近代の日本文学に詳しく思えるってよく言われるんです。でも近代文学を読んではいたんですが、さほど読書家というわけではないですよ、念のため。

作品紹介



▲アニメ化された『有頂天家族』
下鴨社に住まう狸一家を主人公に、天狗や神など、人ならざるものたちの交流を描く



▲アニメ化された『四畳半神話大系』
サークル選びを間違えたと言断する京大生がもし別のサークルに入っていたら、という「もし」の世界を描く



▲舞台化された『新釈走れメロス』
太宰治の同名の作品を下地に、京大生がNF中の京大や京都を、追っ手を振り切り縦横無尽に駆け巡る

はみだし
すてーじ

本当の夏休みはこれからだ……!!
⇒京大生らしい過ごし方をしたいですね。

(文・院 うむ)
(ぜひぜひ森見さんのを参考に!!;編)

京大生に一言

——最後に、京大生にメッセージをお願いします

何を皆さんに言っているかわかんないです（笑）。大学生の面白い日常を描いた作品が僕の作品の中には多いので、よっぽど大学時代は楽しかったんでしょうねって言われます。けれど、実はそうでもなくて、そんなに充実していたって感じでもないんです。

学生ときは、ずっとやる気が出ないとかこのままでもいいのかなとか、もやもやしていてどうも楽しめなかったんです。だからあんまり偉そうなことは言えないですね。自分が大学生のときに大学を卒業した先人からの話を聞いても、素直に聞くとはずまず思えないです。

たとえば、デビュー作の『太陽の塔』を書くまでは全く違う作風でしたし、『太陽の塔』みたいな文章ってもともとそんなに書きたかったわけではないんですよ。狙って作ったわけではなく、全然自分が

意識していない、ライフル射撃部のノートとかで修行していて、勝手にそっちで芽が出たという感じなんです。だから何から芽が出るかわからないから、いろんなことをやっておけばいいんじゃないでしょうかね。でも他人から「今のうちこうしておいた方がいいよ」とか言われても、自分に関わってくることや日常に関わってくることじゃないと結局やらないんですよ。言ったところでみんな同じ間違いをしていくと思います。

だから、「僕はこんな失敗をしたからみんなは気をつけてね」とか、いろいろ言うことがないわけではないですけど、それを言うことに意味があるのかということに対しては疑問を感じます。つまり、メッセージがないっていうのがメッセージですかね（笑）。

——ありがとうございました (P.N.玉露)



▲森見さんが数々の作品の中でも特に思い入れが深いとおっしゃる、デビュー作、『太陽の塔』とともに

はみだし
すてーじ

7回生以上に実際に会ったことがない。
⇒会うのは簡単です

(法・5 みつらん)
(それじゃあ、あなたが…… (以下略);編)